

サッカーインターハイ県大会準決勝

今年のインターハイサッカーは、聖光学院を破って準決勝に進出した。全国大会常連校となった尚志が強いのはこの10年のことだ。平成10年当時から磐城高校は、常に県内トップのサッカー王国だった。

平成11年のインターハイと選手権はともに全国に進出した。ラグビーも平成8年の後、11年に全国に進出した。その時の3年生のメンバーには、今、高校の教員や、小学校や中学校の教員になったものがたくさんいる。この8月11日の山の日に、20年ぶりの同窓会を開く。

当時は、学年400名の男子校なので、傑物がたくさんいた。三国志の人物たちのようだった。朝から、弁当を食べている者や、市川パン屋の売り出しのため、ベランダから飛び降りて買いに行くものや、スリッパのままで部屋に出入りするものや、若松先生につかまるものや、裸で体育大会のリレーを逆走するものや、文化祭では、下帯一本の100名の男たちが、女子制服が中にあるまま凍らせた1メートル四方くらいの氷を一生懸命溶かしていたのを思い出す。磐高解凍と銘打った男女共学化する前の文化祭だった。

インターハイの準決勝は、0-3で学法石川に敗退してしまった。最後の10分間、長らく腰の故障のために苦しんでいたM・H君が出場した。立つこともままならない半年だったが、ようやく動くことができるようになったのだ。チームは前半開始早々得点され、前半で0-3となった。後半は、0-0のまま終了することができた。最後の10分だったが、悔いを残すことはあったろう。存分に戦ったわけではないことも分かった。

続きは、これからだ。この続きは、こだわってこだわってこだわってずっと引きずって、どこまでもこだわって最後にやり遂げたというところまでこだわるしかない。

自分も、野球部を3週間でやめたことにこだわって、教員となり野球の監督になり9年続け、母校に来てやはり野球部顧問を9年間続けた。その引きずりの気持ちは今も球場に足を運ばせる。

膝をけがして、3年の大会に出なかった教え子は、最後の夏に一滴の涙もこぼさず、膝を手術し、教員を目指し、何度も教員採用を受け、こだわってこだわって教員になり、今も野球部の監督を続けている。

サッカーもラグビーも野球も、最後にひと花も咲かすことのない者たちのこだわりが、次の10年20年を形作る。磐城高校そのものが、再生工場なのだ。再びよみがえる魂を連鎖させるところなのだ。